

優秀賞

職人の技に思い

鹿児島県 南さつま市立長屋小学校六年 深龍之介

五月、修学旅行で熊本城を訪れたとき、熊本城の姿を見て驚いた。

平成二十八年四月の熊本地震で、石垣がボロボロにこわれていたからだ。

この石垣は、熊本城を『難攻不落』とたとえられるものの一つだ。目の前の変わり果てた姿に、城がかわいそうに思えた。

「熊本城全体が再建するまで、約二十年かかると言われていきます。」

ガイドの方の話を聞いて、なぜそんな時間がかかるのか疑問に思いながら足を進めた。歩いていくと、石の柱一つで大きな櫓を支えている戌亥櫓に出会った。それを見て五年生の時に国語の授業で学習した『千年の釘にいどむ』を思い出した。

『千年の釘にいどむ』は、一九七〇年にスタートした薬師寺の再建計画の話だ。薬師寺には、七つの

を交互に組み合わせて作られているらしい。約四百年ほど前に、当時の職人たちの知恵と努力で作られたものだろう。その細かな計算で作られた石垣だったからこそ、あの大きな地震の揺れにたえ、崩壊の拡大をなんとか防いだと考えられている。あらためて、職人の知恵と思いに感動した。

しばらくすると、石がたくさん集められている場所に出た。

「この石はただ積み上げるのではなく、一つ一つに番号をふり、昔の写真や資料を見て元の姿に復元するのです。」

ガイドの方の説明を聞き、はっとした。

ただなおすだけではなく熊本城を作った人たちの思いや知恵を大事にして、元の姿と同じように戻していく。そのために約二十年もの時間が必要なのだ。しっかりと再建し、次の世代へつなげていく。そうすることで、熊本城は、かけがえのない宝物となるのだろう。熊本城の再建はすごいことだと実感した。そして、その裏には、職人の技や思いがたくさん詰まっていることも忘れずにいたい。



すばらしい塔が建っていた。しかし、戦火のために消失してしまい、現在残っているのは三重の塔、東塔だけになってしまった。東塔は約千三百年前に建てられ、現在も残っている。残りの塔を古代の建て方とできるかぎり同じ方法で、現代に再現しようとする話だ。どうしたら、古代の人々に負けない物を作るか。宮大工、かわら職人、釘を作るかじ職人等、一流の職人が日本中から総動員された。その中の釘職人白鷹さんは、材料の性質や釘の形、固さなど様々なことを調べ改良を続け、納得のいく釘を完成させるまで何本も何本も作り直した。

職人の知恵と思いの深さは、熊本城でも同じだ。熊本城の石垣は、最初はゆるやかで簡単に登れるように見えるが、上に行けば行くほど反り返しが激しくなり、忍者も登ることができないような作りになっている。武者返しと呼ばれる作りだ。直方体の石